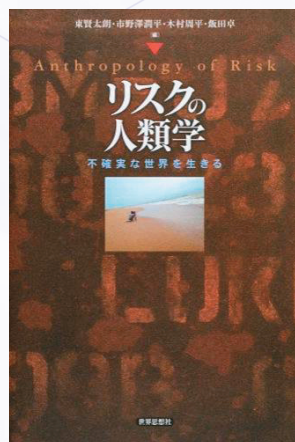


ようになります。リスクが管理可能となったことで、個人は駆り立てられるようにリスク回避の意識を内面化する傾向が顕著になります。リスク管理に失敗した人は、上述した肥満がそうであるように、非難や排除の対象となります。昨今の新型コロナウイルス感染症拡大でも、自衛警察やマスクポリスといわれる人たちが出現したように、感染しないことが良いという価値観以外は許容されない風潮が強くなりました。私たちの生は感染リスクを回避するという一つの未来に方向付けられ、リスクで塗り潰されていったと言えます。

現在、私は「不確実性」についての研究を始めています。根底には、リスク化が塗り潰してきた、未来の不確実性の多様な可能性に目を向けたという問題意識があります。人類学では、2000年代になりリスク研究をはじめとして、人々がどのように未来に関わっているのかについての研究が盛んになっています（※1）。中でも、人間には予見不可能で人間の知を超えるような自然の脅威に対峙した時に、不確実性はどのように立ち現れ、国家や専門家や人々などのように統治するのかについての研究が活発に行われています。この分野が対象とするのは、ほとんど防ぎようのない将来の災害や、起こってからでないと対処できないような破壊的な事態、したがって予防したり制御したりもできないような事象です。例えば、感染症や、生物テロなどに代表される国家の

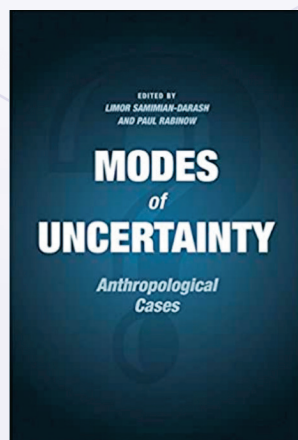


不確実性研究の前身のリスク研究会での成果『リスクの人類学』(2014)

安全保障や公衆衛生の脅威に対し、国家や専門家がいかにして統治し、未来に備えるのかについて、さまざまな事例が報告されています。

不確実性の想像力

ここまで読まれた方は、恐ろしい未来が待ち受けているのかと思うかもしれません。しかしながら、私たち人類学者の多くは、不確実性を実体的なものとしてのみ捉えているわけではありません。むしろ、不確実性とは私たちが現在から未来をどう見るか、という方法に関わるものだとは私と考えています。不確実性という概念を通して、現在から未来に具体的な内容を与えることで、現在の実践や経験が形づくられていきます。そのため不確実性に対する想像力が非常に重要になってくるのです。なぜなら、想像力次第で私たちが今後の世界を経験



※1 人類学における不確実性研究の論文集(2015)

※2 科学研究費助成事業(基盤研究(C))「人類学における不確実性をめぐる理論的視座の再構築」、国立民族学博物館共同研究会「観光における不確実性の再定位」等

研究最前線

THE FRONT LINE OF RESEARCH

政治経済学部

いかにして未来を見るか：不確実性の人類学的研究

PROFILE

碓 陽子

IKARI Yoko

政治経済学部専任講師
専門：文化人類学



1977年 福岡県生まれ
2000年 明治大学法学部卒業
2006年 カリフォルニア大学サンフランシスコ校客員研究員
2012年 東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学
2017年から現職
博士(学術、東京大学)

主な著書・論文

『ファットの民族誌：現代アメリカにおける肥満問題と生の多様性』(明石書店・2018年)
『観光人類学のフィールドワーク：ツーリズム現場の質的調査入門』(共編・ミネルヴァ書房・2021年)

所属学会

日本文化人類学会

リスクで塗りつぶされた、
未来の不確実性の
多様な表れ

私は文化人類学を専門としています。博士課程の時に、アメリカのファット・アクセプタンス運動という肥満差別の廃絶を訴える人たちのフィールドワーク調査を行

い「リスク」について考えました。現代は、肥満は将来の病気のリスクだとする予防医学のリスク言説が支配的です。病気のない将来はもちろん望ましいですが、「健康は良いこと」という圧倒的な価値観によって、太った人たちは自己管理ができない人として差別や偏見の目に晒されます。私はこの調査

で、リスクという特殊な未来の見方が私たちの生を覆い尽くしている有り様と、それに対抗し今を生きようとする人たちについて描きました。

が、巨大化した科学技術がもたらす利便性が、他方で環境汚染や原発事故などの予測困難なリスクを生み出していると警鐘を鳴らしたことが嚆矢となりました。その後のリスク社会論では、未来の不確実性が確率統計の技術を使って可視化され、管理の対象となっていくリスク化が批判的に検討される